
女神しか知らない恋の道!??

漣香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神しか知らない恋の道！??

【Nコード】

N5478Z

【作者名】

澪香

【あらすじ】

平凡女子の天川奏と不良男子？の柳澤零が描く恋愛＋SF＋ファンタジーの学園ストーリーです

第一話 小さな出会い

キンコーンカンコーン

鐘の音が学校全体に響く

「今日は転校生が来てまーす」

加藤^{かとう}先生は勢いよくドアを開けながら言った

先生が黒板に転校生の名前を書いている読んでみると柳澤零^{やなぎざわらい}と書いている

「自己紹介よろっ」

「神道高校^{かみどう}から来た柳澤零……です」

神道高校？聞いたことがある……

「神道高校ってあのヤバいくらい有名な？」

教室がザワザワしている

「静かに、零君は窓側の一番後ろの席ね!」

うそ……私の隣じゃん殺されるって

さっき思い出したが神道高校は生徒のほとんどが不良で有名だった

「おまえ名前は？」

いきなり名前を聞かれた初対面なのにその言い方あり？

「あ……天川奏あまかわかなでで……です」

「あっそ」

聞いてきたのそっちだろ あっそ って何だ

零は席に座ると授業の用意をしている不良じゃないのか？？

一時間目は数学だった

「おいつ教科書を忘れたから」と言い手を出す

えっ私に言ったの……そりゃあ隣の席だしね……怖いよお

私は不良男子（零）に向かって目を合わせずに教科書を渡した

「ありがとう」

不良に感謝されたぞ……おいつがかこいつ本当に不良か？？

「零ってやつ不良なの??かなっち」

放課後になると静川結花しずかわゆかが質問してきた

「知らないよ そんなの全く話してないし……」

「ええ〜十回は話してたくせに〜」

確かに十回は話したっていうか話かけられたからしかたなく・・・

「まあいいや 帰ろっか」

朝 学校へ行くときは雨が降っていたが今は晴れていた

「ねえかなつち 神道高校ってお化けがでるらしいよ」

「ええ〜お化けもいて不良もいるって超ヤバいじゃん」

今日は私にとっては大きい出来事だったが世にとっては小さな出来事でしかなかっただろう・・・

第二話 女神に会っちゃった!??

今日は晴れだった不良男子（零）に出会ってから晴れの日が続いてる

いつものように学校へ行く用意をしていた

異変に気づいたのは顔を洗つてるときだった

「その娘……ここはどこじゃ、冥界めいかいか天界てんかいか??」

私はビックリして顔をあげると鏡には私の顔に似ている人がうつっている

「だ……誰……家には私しかいないのに……」

私は後ろを向く……誰もいない　ていつか冥界って何?天界って何

「わらわはアポロンじゃ　お主は……」

アポロン?冥界?天界?何それ?????

「わ……私は天川奏……」

「奏??もしかここは人間界にんげんかいか??」

はあ??何だこいつ人間界?人間が住んでるのはあたりまえだろ

「人間じゃなかったらお前は何者なの!!」

「わらわは女神じゃ 天界の者じゃ」

天界の女神??アポロン??あれ??ギリシャ神話で似たような事を聞いたことがあるぞ

私はふと時計を見る7時35分

「ヤバツ、学校に遅れちゃう・・・」

アポロンだかも気になるが今は学校へ行かないと・・・

キンコンカンコーン

学校の鐘の音が聞こえる

私は急いで階段を駆けている

2年生の教室は3階なので、もう息がハアハアしている

2年B組の教室の前に来るといったん止まって息を整えた

「遅れてすみません!!」

教室中に私の声が響きわたった

教室を見ると誰もいないように見えたがよく見ると一人の男子が学校の用意をしている

「よお奏お前も遅れたのか」

声でわかった不良男子の零だ

「しかたないじゃん！！いろいろあったんだから」

「女神に会ったとか??」

え・・・何で知ってんの??家には誰もいなかったし・・・

「なんでわかつ・・・そ・・・そんなことあるはずないじゃん・・・

」

「やっぱお前 嘘つけないんだな」

へ???もう意味わかんないよ・・・

「お前には女神が見えるんだろ」

???まだ一人しか見たことないもん!

「まだ一人しか・・・皆みえるんじゃないの??」

また口がすべった・・・

「皆みえるわけじゃねえよ」

「何でそういふ事してんのよ」

ああ言っちゃった・・・

「俺は小さいときから神や女神が見えるから」

第三話 零の秘密

「小さいころから神や女神を見ている!???」

なにを言ってるんだ・・・実際に女神とか神とか・・・まあ見ちゃったから信じるしかないか

「どうして零は神とか女神とか見れるの?」

「俺は普通の人間じゃないから」

はあ????普通の人間じゃない???だったらなんだって言うんだよ

「どんなふうに普通じゃないの??」

「まあ簡単に言うと天界で生まれたから」

天界で生まれた?ただそれだけで神や女神が見れるのか!???

「俺は天界住人のアイリスと人間界の人間の間から生まれてきたんだ!!!」

アイリス??なんだそりゃ??

「アイリスって??」

「アイリスは虹の女神だ」

虹??そういえば零と出会ってから毎日のように晴れている

しかも雨が降ったわけでもないのに虹が毎日のように出ている・

「じゃあ最近毎日のように晴れて虹が出ているのは、そのせいなの
!?!?」

「まあそうだけど・・・ていうか一時間目の体育ってさぼっていい
の?!?!?」

「あっ!!忘れてた!!!」

こうしてこの話は終わりになり零の秘密も少し分かったので体育
の用意をはじめた

第四話 女神について!??

「ねえねえなんで遅れたの??」

急いで体育着にきがえて校庭に出た私にむかって静川結花が言った

「ハアハアいろいろ・・・あつたの」

走ってきたので息があらい・・・

「いろいろって何??」

女神を見たなんて言っても信じないよな・・・

「寝坊したの!」

さあ初めて嘘ついたよお結花・・・ゴメン・・・

「そつなんだ・・・って嘘ついてるでしょ顔にでてる!」

「なんでわかつ・・・嘘なんかついてないもん・・・」

「やっぱり、かなつちは嘘がつけないんだ」

「うう・・・」

「いいよ、かなつちが嫌なら聞かない・・・」

涙目になった私にむかって結花は優しい笑みをむけて言った

「ゴメン・・・」

「いいよ気にしないから」

結花は小学校のころから優しかった・・・私があんなことになってもいつも見方でいてくれた・・・

それから昼休みになった・・・

「朝の話は秘密だからな!!」

後ろから声がした・・・零だ!!

「朝ってあの女神の話??」

「それがいなんかあったか??」

そんな事いわれても・・・

「放課後にその話の続き話したいから残れよ」

えっさっきので終わりじゃないのおお

「う・・・うん、わかった」

放課後・・・

「よし誰もいないな・・・」

零は教室に二人しかいないのを確かめて言った

「なんでそんなに警戒してるの??」

「冥界のやつが見てたり聞いてたらヤバいから・・・」

冥界・・・そういえば冥界についてはなんも聞いてないな・・・

「よし!!!・・・じゃあ神と女神についての話からするか・・・」

「うん・・・」

「まず、神と女神は愛の力が源なんだよ・・・」

愛の力!???

「なんで私には女神が見えたの??」

「おまえに好きな人でもできたからじゃないのか??」

好きな人・・・零・・・ちがうちがう

ピンポンパンポンみなさん帰りましょう

「あつ明日ね・・・」

はあなんでこんなタイミングに・・・

第五話 奏の秘密?????

やばい、やばい、やばい何でこんなタイミングであんな事を思い出したの……

私は廊下を走っていると結花がすれ違った……

「かなつち???どうしたの?????」

……結花ゴメンもう終わったことなのに思い出すと涙が止まらないんだよ……

「結花……こないで……」

私の声は廊下に響きわたった……

学校を出るとさっきまで教室にいた零がいた

「どうしたんだ?さっきまで泣いてなかったのに」

「か……関係ないでしょ!」

「幼稚園のときのか??」

!!なんでこいつがその事をしってるの!???

「そ……そうだよ……」

もうしかたないな……

「ちょっと昔の事を思い出して泣いてただけだから・・・そごいでよー!!」

「ヤダね・・・」

「な・・・どくのもできないのー!!」

「まだ話は終わってない・・・」

「そ・・・そんな理由で・・・」

「その幼稚園のときの事と関係があるんだよー!!!!!!」

「はあ??何言ってるの????」

私は泣きながらも話す・・・

「いじめられてたんだろ!!結花ってやつに・・・」

まっすぐに言わないでよ・・・

「あのときも今も結花は変わってない・・・」

「ど・・・どづいづいと??」

私は泣くのを我慢しながらも声はふるえていた

「あいつのなかには悪魔・・・お前のなかには女神がいるんだよ・・・

」

第六話 あらたな不思議??

零にあんな事を言われたが嘘だと思い零をおして走り帰った

家 5時15分

「う・・・ううう・・・」

私はあの事（いじめられてた事）を思い出すと自分が止められない

ピンポーン

今日は留守のふりをしようと思ったが何回もなっつるぞいのでしかたなく出ることにした

ピンポーン ピンポーン ピンポーン・・・

私はドアを開けたそこには結花が立ってた

「なんかあったの?? かなっち?? 男子になんか言われた??」

結花は私のことを見ながら言った

「ゴメンちよつとね・・・」

私は作り笑顔でニコッと笑った

「そ・・・そう・・・」

結花は最後にこう言って帰った

しばらくするとまた・・・

ピンポーン・・・

さすがにもう泣きおわったので出た

「よっ、さっき結花きただろ」

零だった、こいつは不良男子と言われ友達があんまりいないやつだ

「そっだけど何??」

「いやぁチャイム鳴らそうしたら結花がきてさぁ・・・」

「きて??どっしたの??」

「・・・ちよつと待て・・・」

零はそっいつて勝手に家にあがった

「ちょ・・・何勝手にあがってんのよ」

「いや、この家に魔法陣を使ったあとがかすかただけどあるから・・・」

そっいつと零は何か呪文のように何かを言っている

「なんていつてるの??」

そう言ったが零は無視する

「・・・」

怒りようがない逆に言えば唾然していた零の周りには赤い何か
ポツと出ている・・・

「結界か・・・」

結界って何??あのアニメとかであるシールドみたいなもの??

「この家や、奏が普段つかってる物すべてに結界がはってある・・・」

何を言ってるの・・・誰がはったっていつの???

「だ・・・誰がはったの??」

私はよくわからないがなんとなく質問してみた

「わからない・・・でもかなり強い魔術だ何年ももたない術なのに
10年はもってる・・・」

魔術!??10年??さっぱりわからない

「奏の家族の写真ってあるか??」

「え・・・あ・・・うん、あるよ」

お母さんはだいぶまえに死んでお父さんは仕事で大変だった

「これでいい??? だいぶ前の写真だ」

零にそれを見せると零はびっくりしているようだ

「どうしたの??」

「こ・・・これはカオス殿!??」

「カオスって誰?? お母さんは天川あまかわみく未来だよ」

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

第七話 裏切りと真実

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ……」

私は零が言ってる意味がよく分からなかった

「よく分かんない……くわしく説明して!!」

「う〜んくわしくって奏のお母さん《カオス》がセカイの始まりってことかな……」

お母さんがセカイの始まり??

「まあそのうち分かるから……そうだ鏡……鏡」

「なんで鏡さがしてるの？」

「あつあつた この鏡に奏の顔をうつして……」

「またお主か……まあとりついてしまったからしかたがあるまい」

鏡にうつった私が言ってるいうか顔とかちょっとちがう

「零……もしかして私にいる女神って……」

「そう……この方はアポロンって言って音楽 予言 弓矢 牧畜の神だ」

疲れて幻を見ているかと思ってたこいつが女神だったとは……

「でもなんで私なんかに・・・」

「しらねーよ そんなの遺伝子的にじゃないか？」

「お主らラブラブのとこすまぬがここから逃げたほづがいいのでは
?？」

??何を言ってるんだ??

「いくぞ奏・・・」

そういつと零は私の手をグツとにぎって、外へ出て学校のほうへ
走る

「零どうしたの??なんでアポロンが言ったことで逃げてるの嘘か
もしれないじゃん」

零の手が温かい・・・

「嘘じゃないかもしれないぞアポロンは予言の神でもあるのだから
・・・」

「それは分かったから手 はなしてよ・・・」

私は顔を真っ赤にしながらあわてて言った

「俺の足の速さについてこれるならいいけどな」

そういつと零は手をはなす私は走るのをやめそうになったけど頑

張って走る

「学校だったら大丈夫だろ」

そついうと見覚えがない学校??のなかに入っていた

「ま・・・待ってよ」

私は全力で走る零は階段をかけあがり3-Aの教室に入っていた

「な・・・なんでこんなところに逃げたの・・・」

「なんでって・・・ここは・・・」

零は言葉を中途半端にしながら真剣な目になった

「ミツケタ」

かすかに聞こえたロボットかのような感情のない声

「でてこいよ 悪魔」

零が教室中いや学校全体に響くくらいの声で言った

「悪魔って・・・」

「冥界のいや・・・地獄の住人じゃ」

私が片手に持っていた鏡にうつるアポロンが言う

「敵2人・・・女・・・女神いりと神と人間まぎりの男・・・」

今度は女の声が出た・・・聞いたことがある声

「敵は1人か・・・」

零が言った

「なんで・・・敵は2人じゃないの??」

「いや、敵は1人じゃ悪魔は人間にとりつく」

「そう・・・もし悪魔が2人だったら悪魔がもう復活している事になる」

私の質問にアポロンと零が答えてくれた

「メガミ・・・カミ・・・クロス」

どこからか聞こえてくる声・・・

「ユカ・・・トモダチヲクロスケドイイカ」

「ええいいわよはつきり言えば偽友だから・・・」

暗闇からゆっくりと出てくる1人の女

「ゆ・・・結花!??」

「ああ奏か・・・ゴメン前から嫌いだったんだ」

結花は満面の笑顔で言った

「う・・・嘘だよね・・・」

「嘘じゃねえよ」

零が大きな声で言った

「う・・・嘘だよ・・・ね・・・」

私の目には涙が・・・

「さつき俺がお前の家いったときに結花が舌打ちしてたしな・・・」

零が私を説得するように言う

「そ・・・そんな」

「さつきとこんな人生を終わらせたいならこっちに来てすぐらくにしてあげるから」

結花はさつきから満面の笑顔だ・・・

「じゃ・・・じゃ幼稚園のときの気持ちは嘘だったの??」

「そう何年我慢してたと思ってんの?? まあいいわさつきとはじめましよ」

「はじめるってなにを・・・」

私はもう泣いてなかった。ただ、零やアポロンがそばにいてくれたから。

「戦争を・・・戦争を始めましょう」

結花は不気味な笑い声とともに言い、暗闇に消えていった。

「奏・・・今からは戦いがはじまる・・・アポロンは全く力が戻ってない・・・今から落としていいか」

零は真剣な顔で言った。

「落とすって何を」

「とくかく目をつぶって・・・」

私が目をつぶると私の唇にはやわらかいなにかがあたっている。

びっくりして目を開けると零の唇だった。

「なんじゃ無理くりじゃのう。零たしかに奏の好きな者はお主じゃが・・・」

「いいじゃないですか俺もあいつのこと好きなんだから」

「まあいい話はあとじゃ」

アポロン
私の頭には天使の輪のようなものがあつた

「おおこんなキス一回でこんなに力が戻るとはお主は天才じゃなあ」

「うるさいな・・・ゼスと呼べゼスと・・・」

「ほうお主はゼウス殿の子ではないか!？」

「そつだ・・・」

「あら神々どつしのお話中ですみませんがもうはじめていいかしら
」?」

「ああ臨むところだ!！」

第八話 大人な遊びしませんか??

アポロン

今わらわは学校とやらにおる・・・ここは戦場じゃ

「女神と神もどき・・・ふふ・・・すぐ楽にしてあげますわ」

あの結花とやらは不気味な笑顔で不気味な笑い声をたてながら言
った

「ここはダメじゃ・・・校庭まで逃げないと死ぬぞ」

わらわの予言では学校全部破壊すると出た

「わらわは東門からゼスは西門から・・・」

わらわとゼスは同時に走り出しふたてに分かれた

「クツやはりこちらにも敵の手が・・・」

わらわの東校舎のほうにはトゲのトラップが多く仕込んであった

「ふふ・・・校舎から出るまえには殺せそう　ふ・・・フハハハハハ
ハハハハハハハ」

どこからか聞こえてくる悪魔の声は不気味さを増している

「わらわはこんな簡単なトラップでは死なないぞ・・・」

わらわの声も学校中に響きわたり

「おう！！こんなところで死ねっか」

ゼスからの返事が聞こえた

「そろそろウォーミングアップは終了じゃいつも通りいこうではないかお主もそうではないかゼス」

わらわは術を使って弓矢を出しトラップを一つ一つ確実に射る

「そうだな・・・負けてらんねえー」

ゼスのほうからは魔法陣のヒカリが見えた

「クツやはり本気で叩かないと死にそうにもなんなんわ・・・おいっあれで一発で殺せ」

「フハハハハ オヌシモホンキデイクノジャナ」

小さい声だったけどかすかに聞こえたたぶん屋上あたりにいる・・・

「出口じゃ・・・」

大きな魔術の気配を感じた・・・わらわはゆっくり外へ出た

「ヤアヒサシブリダナ アポロンオヌシハマツタクカワツテナイ」

「お主は謝るな・・・つらい思いをしてきたんだろ・・・」

そういつてわらわは瑠奈と言う女をだいた女の目からは涙・・・

「ありがとうございます・・・ありがとうございます」

それから女はどこかへ帰っていった

奏

「なんであの子があのときあの子が辛い思いをしてきたのが分かったの？」

私は鏡にうつつた私アポロンに聞いた

「あんな女神や神は愛の力で復活するが悪魔は不幸の力で復活するのじゃ！！」

「不幸の力・・・それなら分かるか・・・」

ゼス
零

俺は痛みを我慢しながら魔法陣を書いていた

「ハアハアハアハアハア」

俺の腕や膝・・・いろんなところから血が大量に出ている・・・

「フフ所詮人間ねこっちは殺せそう」

廊下に不気味な声が響きまるで洗脳状態だ

「で・・・できた」

俺が書いていた魔法陣はテレポートができる魔法陣だった

「時空の神よ 俺をG市N学校の校庭へ・・・」

魔法陣がヒカリだし気がつく到校庭にきていた・・・そこには女が1人たっていた

「どうしたの???大丈夫??」

血は止まらずダラダラと流れている・・・

「さっそく悪魔入り女か・・・」

「ヨクワカッタナ・・・マアアツチトチガツテカンタンニコロセソウダナ」

あっちはうまくいったのか・・・

「魔法陣種第24番機・・・抹殺の目玉・・・悪魔・・・死ね」

俺の目の前にはグロテスクな光景が広がっている

「まあ女さえ殺さなければいいのだからこんなんでいいだろ」

奏

「零???大丈夫?????」

私が校庭に行くと血のたまりがあつた零に聞くと

「俺の血だ」

という・・・そのわりにはけがした場所が少ないし、出血も止まっている

「そうなんだ・・・」

「ちつやられたか・・・わたくしが手をくださるのはもう少し先にしましょう」

私達が屋上を見ると黒い翼のカラス達が集まり不気味だった

次の日・・・

私は結花のことがあり学校に行きたくなかったが零もいるので行ってみた

キンコーンカンコーン

加藤先生がドアから入ってくる・・・最初に口にした言葉それは

「結花さんは転校しました」

教室がざわめきで包まれた あとで先生に聞いてみた

「どこへ転校したのですか？」

先生は困ったようにして行った

「それがわかんないんだよね・・・家は売り出されて、今考えると家族の顔見たことないのよね・・・」

「そうですか・・・」

私がそういうと先生は何か思い出した口調で言った

「そういえば下駄箱にね入ってたの!!」

「何が入ってたんですか????」

「カラスの羽よ・・・しかも何枚もよ!!」

カラスの羽・・・もしあの出来事のあとに学校に来たのなら・・・

そのときだった・・・放送のチャイム

「ピンポンパンポン この学校は私達が支配した!!」

第九話 あらたな敵!??

「ピンポンパンポン この学校は私達が支配した!」

学校中はザワザワと荒れている・・・

「どうせ演劇部か放送部の練習だろ!」

などと放送が嘘だと言ってる人がほとんどだった そのときだった教室のドアが開いた

「始めましてー黒い鳥ブラックバードの黒羽です ここに女神と神もどきっているう??」

ブラックバード・・・黒い鳥・・・カラス・・・結花!!!!!

「あつれーゆかりんの情報だとココなんだけどなー出てこいよクラス的全員を殺してもいいんだぜ」

黒羽いうやつはたぶんだが結花と同じグループの者なのだろう・・・

「はあ?そんなやついるはずねえだろ!」

クラスの男子はそういつている

「危機感がないやつらね・・・」

そういつと黒羽は男子1人を捕まえ首に手を近づける男子は零だ

った

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦・・・」

ぼそりと零がつぶやいた黒羽の周りを囲むように魔法陣が作られていく・・・

「フハツ自分から出てくるとは光栄だね・・・魔術種第21番機・・・狂歯車・・・」

黒羽がそう言った瞬間・・・魔法陣がパズルが狂ったかのように崩れていった

「チツ・・・」

零は舌打ちをして黒羽から離れた

「アポロン・・・お前もほうが力あるだろ」

零はそう行って私からアポロンに変われと合図する

アポロン

「なんじゃゼスわらわに協力せよと・・・まあ良いがこの服は動きづらいぞ」

わらわはジーパンとなら指さしながら言った

「しらねーよ ちよつとこいつらを倒せばいいだけなんだから」

「しかたない天界術式第44番・・・罪と正義の分かれ目・・・」

わらわの手には天術のかたまりでできた刀で黒羽にたちむかった

「魔法陣種第25番機・・・神の鉄槌・・・」

ゼスはギロチンの刃でできた刀でたちむかう

「ふふつやつと2人でましたわね・・・死になさい」

黒羽がそう言った瞬間に教室からはツルのようなものが出てきた

「なっクラスのみんなを殺す気が!」

零はクラスのみんながいるのに気づいていった

「フハハハハこいつらは道具として使わせてもらう」

そついうとツルのようなものは皆めがけて動いてくる

「キャーーーーー」

ツルは皆の体の中心をつらぬいていた皆の体からは大量の血が・・・

奏

「もうやめてこんな悲しい思いをするのは私で十分」

私はアポロンから自分の意識を奪い取り必死に叫んだ

「フフ言ったわね　じゃあ遠慮なく」

そう言つとツルのすべてが私の体めがけて動く

「奏！！」

零だった零は刀を使いツルを確実に切っていく

「カミトメガミ・・・コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

クラスの皆が私のところに近づいてくる

「やめてやめてやめてやめて嫌嫌嫌嫌もう昔みたいに1人はヤダヤダヤダヤダ」

アポロン

「お主ら・・・友達をこんな目にあわせようと・・・ただですむと思うな・・・天界術式第1番・・・幸運と不運の境・・・」

クラスの者はみなバタバタと倒れていく・・・別に殺したわけではない眠らしたのだ

「チツやはり人間は使えない・・・この学校ごと死で埋めてやる」

ツルはどこかへ引っ込み黒羽はどこかへ行った

「ここは離れよう・・・」

体力を大幅に消費したわらわには今予知は使えない・・・

「だが学校の人々が・・・」

ゼスはそう言っつて反対意見を出した

「何を言っつておる・・・もし神と女神がそれなりに力を取り戻せれば簡単な事ではないか」

わらわはこつ言い残し奏へ変わった

奏

「え・・・あ・・・」

私はいきなりアポロンに言われたのでどつすればいいのかとまどつていた

「あ・・・あのさ前から好きだった・・・」

「え・・・い・・・今・・・」

「お前のことが好きなんだよ!」

私は顔が赤くなった・・・好きな人に告白されたのは初めてだ・・・

「あのおー良いムードのところすみませんが私・・・協力しますよ・・・」

そこには腰のあたりまで伸びてる茶色の髪の毛でいかにもモテそうな女の子がたっていた

「わ・・・私・・・水谷葵みずたにあおいって言います・・・あの・・・その女神が入ってます・・・」

「め・・・女神入り!!」

私と零は声をあわせて言った・・・この学校にまだ女神入りがいれるとは思っていなかった

「まあメンバーが1人増えたしさつさとみんな外に・・・」

「はい!!」

零が言い終わるまえに葵さんは返事をした・・・なんか不思議な子・・・

「ここに女神と神の力あり・・・この人々の愛でみなを助けたまえ・・・」

そういつて目を開けると私達は校庭にいた　もちろんクラスの皆もだ

ドッカーン

それは校庭に出てすぐのことだった激しい爆発音がし学校が崩壊していく

次の日

学校から電話があった学校は新しく建て学校ができるまで休みだ
という

「しばらく零と会えないのか・・・」

さらに零の告白のせいかアポロンには翼がはえた

プルルルル

ケータイの呼び出し音になった だれだろう

「誰で・・・」

「た・・・助けて」

その声は葵さん以外誰の声でもなかった

第十話 奏が・・・

「た・・・助けて」

「な・・・どうしたの・・・」

「M地区の旧校舎で・・・」

そこで電話は切れた私は夜で雪が降ってるのを無視してM地区の旧校舎にむかった

「葵さん・・・いますか??」

旧校舎は昔、神道高校だったらしいとても暗く怖いしかも迷路のように道がたくさんあった

「ぎゃーーーーー」

葵さんの叫び声が聞こえた私は迷路のような廊下を走り一つの教室のまえで止まる

「オカルト研究部・・・」

私はゆっくり教室のドアを開けた・・・だがそこには人間の影なんてどこにもなかった

「葵さん？」

私はゆっくり教室に入った

「遊びませんか？」

後ろから声がした振り返ってみてみるとそこには骸骨がたってた

「椅子取りゲーム・・・やらない？」

すごく怖かった・・・

「は・・・はい」

私は思わずイエスと行ってしまった

「ルールはこうだ勝った人の言うことをなんでも聞く・・・」

勝った人の言うことをなんでも・・・

「そうなんでも・・・な・ん・で・も」

骸骨は私の思ってることを完璧にあてた

「わかった・・・やる」

地獄かのような椅子取りゲームがはじまった・・・たくさんの人形達を相手にやるのだから

「ククク」

不気味な笑い声をたてながら骸骨が勝ってしまった

「じゃあ命令するよボクの仲間になれ!!」

「骸骨の仲間……」

考えただけでゾツとした

「ちがうちがうボクはブラックバードだよ」

「ブ……ブラックバード……」

「そうブラックバード……フフフ君が賭けにのったんだ」

「嫌だ嫌だ仲間を裏切りたくない」

「約束を破るのかい……じゃあこいつを捕まえる!!」

骸骨がそう言うのと私の周りを人形が囲んだ

「われわれは天界を壊すことではない……新世界をつくるのだよ
新世界を!!」

骸骨のその言葉を最後に私は気を失った

……

「おっお目覚めかい？」

周りを見るとお城のようにきれいな部屋だ……王の席のような
ところには骸骨が座ってる

「おいこいつを洗脳室へ連れてけ」

骸骨は私を指さしていった

俺が電話を壊しそうになったとき窓が鳴った

ドンドン

窓を開けると巫女のような人がういていた

「ゼス・・・奏が・・・」

「アポロンか!」

俺はアポロンから奏の状況を聞いた

「奏がブラックボードに!???嘘だろ・・・なんで奏を守んなかった」

「あそこに入るのは私には無理・・・全面的に魔術で入ったら私はもうここにはいない・・・」

「まあいいとにかくそこにつれてけ!」

俺はそういつてコートを着て外へ出た

「どっちだよ」

「あっち・・・G公園のところ」

「よし行くぞ!」

第十二話 洗脳少女VS不良男子

零

俺がブラックバードの秘密基地？につくとそこには人間の影が

「きたか・・・フフ・・・」

ブツブツと不気味に何か言っている女性だった

「奏はどこだ!!」

「奏？あああの子・・・フフ大事な人を助けに来たってわけ・・・でももう遅いよ」

女は不気味に満面の笑みをうかべながら言った

「ここを通してもらう・・・魔法陣種第22番機・・・ココロの針・・・」

「フフそれはわたくしに戦えと・・・そう考えていいのか？」

「ああ・・・」

女の顔からも俺の顔からも笑みが消えた

「だがわたくしに勝ったとしてもお前らはここに入れないあの子が自分から出てこないかぎり会えないわね」

「シネ・・・デキソコナイノカミ・・・」

「魔法陣種第14番機・・・無限の盾インヒイニットシールド・・・」

これでしばらくは耐えられるだろう・・・俺の周りには盾がはられそこに奏が突っ込んできた

「コロスコロスコロスコロスコロスコロス」

「クツ」

強い・・・盾でガードしているがそれでも痛みが伝わってくる・・・あの短時間にどんな事が・・・

「プシユケーサマノケイカクヲジャマサセナイ」

プシユケー？計画？？いろいろ分からないことばかりだ・・・そんな事を考えてる間にも無限の盾も崩壊しはじめた

「そろそろ壊れるか・・・」

そう心でも思ったときに・・・

「あの遅れてすみません!!」

そう俺が読んだ人物とは葵だった

「神術式第28番機・・・月旅行ムーントリップ・・・」

葵のその言葉と同時に満月の光が秘密基地や俺らを照らした

「月の世界へ……」

その言葉と同時に奏が倒れた

「大丈夫か？奏」

「大丈夫ですよ気を失わせただけですから」

葵は優しい笑顔で言った

「魔法陣種第5番機 時空の歪み……」

この術は結花と戦ったときに使ったものだ

「時空の女神よ 俺らを俺の家へ……」

俺と葵そして奏を魔法陣が包みしばらくすると俺の部屋に

「ハナセココハドコダ」

奏が起きたのでやばい行動をされないように柱に鎖で縛りつけといた

奏

目が覚めると誰かの部屋にいた……1人の男が視界に入るプシ
ユケー様の邪魔をする男だ

「ハナセココロハドコダ」

そういえばなんでプシケ様の命令に従っているのだろう・・・まるで束縛人形だな・・・この男はどこかつかない感じがする・・・一緒にいると落ち着く・・・それでも私は縛られているあの人のせいで・・・まるで鎖で縛られ何もかも決められ命令ど通りに生きていくのだろうか・・・そんなのヤダでも逆らう勇気がない逆らったら昔みたいに・・・昔？昔何があったっけ・・・そういえば昔の記憶がない・・・

そんなことを考えながらも私は暴れていた・・・もう何もかもわからない

気づくと私は柱に鎖で縛られ動けなかった

ついさっきまで戦っていたはずの男は私にむけて優しく微笑んでいる・・・なんなんだこの男は・・・誰なんだ・・・思い出せない・・・思い出したい・・・こんな事ホントはヤダ・・・向けだしたい・・・こんな暗い差別ばかりの世界を・・・そうだプシケはそう私に言っただ・・・結局ただ道具としてしか使われてない・・・どうせだったら・・・もう・・・もう・・・

「奏・・・俺を覚えてるか？」

いきなり男が話しかけてきた

「知るか・・・」

何か私の言葉には感情という何かを生み出すことができた気がした

「そうか・・・俺は零・・・柳澤零だ・・・」

「零・・・なんかつかしい・・・」

どこか聞いたことがある・・・私にとって何か大切な・・・大切な人どうしてかはわからない・・・でもとにかく大切・・・大事・・・な人・・・

第十三話 復活

どこか聞いたことがある・・・私にとって何か大切な・・・大切な人どうしてかはわからない・・・でもとにかく大切・・・大事・・・な人・・・

「チツそろそろ記憶が戻るか・・・」

どこからか聞こえる小さな声・・・聞き覚えがあるが分からない
思い出したくないそんな気がした

ドッカーーン

外から大きな音がした零という少年が窓から音のするほうを見ると舌打ちをした

「こんなときに来るんじゃないよ」

誰がきたのだろう・・・分からないがけっこうやっかいな人なの
だろう

「奏・・・一緒に戦ってくれるか？」

ぼそりと零が言った・・・戦うってさっきまで敵のように・・・
でもなんか敵って感じじゃなかった・・・信じていいのかな・・・

「裏切らない？・・・信じていい？・・・」

私は零なら何か信じてもいいと思った裏切らないって思った・・・

「俺はお前を信じる・・・決めるのはお前だ・・・」

私の目からは自然と涙が・・・涙が流れながらも私はコクンとう
なずいた

「信じる・・・まだ何も思い出せないけど・・・でも・・・」

私は泣きすぎてこれ以上何も言えなかった零はそんな私を見なが
ら鎖をほどいて私を解放してくれた

「お前はお前らしくいればいいんだよ・・・俺がお前を助けるから
・・・」

零は私を抱きそう言ってくれた

「行こう・・・」

そういつと私の手をつかみ外へ出た

「出てこいよ・・・いるんだろ結花!!」

結花・・・結花・・・何かとても嫌な思い出が混ざって思い出そ
うと思ったが思い出せなかった

「あれえもうばれた？まあいつか」

暗闇から1人の少女が現れた

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦」

結花をかこむように魔法陣が作られていく

「フフ・・・フハハハハハハハこんなレベルの低い技でブラックバードに勝てると思ってるの」

不気味な笑い声・・・嫌！思い出したくない・・・そんな事を思いながらも昔の出来事や結花の裏切り行為が頭のなかにインプットされていく

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

そのまま私は意識を失った

零

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

奏はそのまま意識がなくなり・・・天界術の暴走が起こったアポロンが奏のなかに入ろうとしたときに起こったアクシデントだ

「奏！！魔法陣種第76番機・・・宝物の探し旅・・・俺の大切なものは・・・」

奏！お前だ・・・

「フフなんかいい調子魔術式第29番機・・・悪ノ目」

結花の悪ノ目とは前に聞いたことがある・・・人の思い出したくない辛い過去を思い出させる技だ

「結花・・・やめろ!!!」

結花は奏のほうを見て不気味な笑顔を作っている

「フハハハハハハハハハハいい景色」

俺は結花の視覚に入り自分が技の対象になった

「チツ邪魔だ」

ぼそりと言われたがそんなのは無視した思い出す辛い過去・・・信じてた人に裏切られた辛い記憶・・・でも奏に比べればそう思った

「魔法陣種第22番機・・・ココロの針」

俺が今いやなのは奏を失うこと・・・奏を助けるには・・・

「針よ・・・結花・・・静川結花を倒してください」

針は結花のほうにむかっていく結花は針の速さに追いつかず体にささる

「フハハハお前は人を殺した・・・人を・・・それはお前にとって忘れられないことだ!!!」

結花はそんなことを言ったが実際は幻覚だ人を殺してなどいない

幻覚の中で殺したのだから・・・だが現実では結花は気を失っただけである

「奏!！」

奏のほうを見ると奏の目からは涙が・・・そう宝物の探し旅は大切な人を助けたいという願いが2分の1の可能性でおこるものである

「れ・・・零??ゴメンね・・・ずっと忘れてて・・・」

「奏・・・」

俺は奏を抱っこし家のなかへ入っていった

奏

目が覚めると零に抱っこされていた

「奏・・・ありがとう」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのだが逆に感謝されたのでちょっと不思議だった

第十四話 葵が！？

「奏・・・ありがとう」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのだが逆に感謝されたのでちょっと不思議だった

再び私は眠り起きると零の部屋の零のベットにいた

「あれえ？なんでここにいるんだろう？？」

私はベットから降りようとしたら何かにあたった・・・電気をつけてみると零だった・・・

なんで一緒に寝てるんだろう？まあいいや私は再びベットに戻り寝た

次の日

私が起きると零はベットにいなかった零の部屋は二階で一階からは良い匂いがした

「ふああああ」

私はあくびをしながら一階へ行った零はキッチンで料理を作っていた

「おはよう・・・昨日はありがとう」

私は昨日の記憶がないでも零に助けられたというのは分かる

「ああおはよう」

零はフライパンで目玉焼きを作りながらいった

私は居間の椅子に座り零の家がこんな感じなんだと思いながら壁紙を見たりしていた

昨日どんなことがあったのだろう・・・そんな疑問がある・・・でもそんな大切な事でもない

「できたぞお」

零はちよつと眠そうな声で言った

「はい」

私はダイニングルームに移動し零の手料理に唾然したご飯、自玉焼き、サラダと水・・・どんだけバランスのよい食事をしているのだろう

「いただきます」

零と私は声を合わせ言い食べ始めた・・・零ってこんなに料理うまかったんだ・・・そんなことを思った

「しちそうさまでした」

私は皿を片付けお礼としてお皿洗いをした

「零って1人暮らしなの??」

「ああ・・・お母さんは女神だから天界にいるし、お父さんは病気で死んだ」

「なんかゴメン・・・」

そっか零は人間と天界の住人の間から生まれたんだもんね・・・

「いや謝んなくても・・・」

「えっあっゴメン」

つい謝ってしまった

「だから謝んなくてもいいから・・・」

零

ピンポーン

家のチャイムが鳴った

「?誰だ??」

俺は不思議そうな顔をしながら出た

「あのえつと葵ですが奏さん元気ですか？」

葵か・・・

「ああ葵か・・・奏なら元気だよ」

俺はそう言いながら奏を連れてきた

「よかった・・・」

葵はなんか変な反応をしている・・・

「大丈夫か？顔を赤くして？」

俺は葵のおでこに手をあて熱がないのを確認した

「熱はないな」

ただそう言っただけなのだが葵は顔を真っ赤にしてこちらを見られ奏はムスツとした表情を見せた

「俺なんかしたか？」

「した」

奏と葵は声を合わせ言い、奏の声は怒った感じで葵の声はあわあわわしている声だった・・・

しばらく静かになり葵が口を開いた

「零さん・・・あの明日・・・学校で言いたいことがあるので・・・」

葵はそう言い残し帰って行った

「奏？なんでそんなにムスツとしてるんだ？」

俺が聞くと・・・

「恋愛事情！！」

どういう意味だ？さっぱり分からなかった・・・別に葵のことはどうも思っていないぞ？

次の日

キンコーンカンコーン

奏と葵の言葉を不思議に思いながらも授業をうけていた

朝、学校に登校してきたら下駄箱に入っていた葵からの手紙「放課後、学校裏の迷いの森の入り口に来てください」と書いてあったのを確認した

放課後

俺は迷いの森の入り口に行くと葵がいた

「待ったか？」

「え……ううん全然……」

葵はちよつと慌て気味だった

「あのえつとちよつと散歩しない？」

葵はそう言つて俺の手をつかんだが、なぜか顔を赤くし手をはなした

奏

私は葵がきつと零になにかするだろうと疑い零や葵に気づかれな
いようにこっそりついてきた

「迷いの森の入り口？」

葵のあとをついていくとついた場所だ

零がきた……なんか話してる……あつ手をつないだ！！あつ
はなした……

葵

どうしよう……2人つきりにしたけど……もつと緊張してき
た……よし……！！

「零さん……あの……私、零さんの事が好きです……!……!」
あわわわあ言っちゃったよぉ……

「ちょっと何やってんのよ!」

私はびっくりして声のするほうを向いた奏さんだ

「零は……零は私の……私の……」

奏さんも慌ててるみたいだ

「2人ともどうしたんだ?」

零さんは何が何だかさっぱりわからず質問してきた

「零……私と葵……ドツチをとる……?」

奏さんが真剣な目で私のほうを見る……

「わ……私も聞きたいです……」

「お……俺は……」

零

「お……俺は……」

奏と言おうとしたが強い魔力を感じたので言えなかった

「敵だ!!」

「じゃあ戦い終わったら・・・答えてね・・・」

奏と葵はそっぴい女神に変わった

「フフフフフフ今日は楽しい遊びになりそう」

上を向くと黒羽がいた

第十五話 新しい仲間は??

「フフフフフフ今日は楽しい遊びになりそう」

上を向くと黒羽がいた

奏

なんでこんなときに敵がくるのーーーーそんな事を考えながら
も私はアポロンにかわった

アルテミス

葵と奏殿女神の意識になり、戦いがはじまった

あと私の名前はアルテミス・・・言い忘れていた・・・

「フフフフ今回は森全体を魔術で困んだお前達の力は弱まった」

黒羽の言葉にブチッとなりつい術が

「神術式第23番機・・・希望の鈴」

私とアポロン殿そして零殿の周りを神術の陣が囲む

これなら少しは魔術の影響をうけない

「チツ小細工しやがって死にな」

黒羽は零の家にとめることになった。ちょっと心配・・・

「ああ結局あれからなんも言ってないじゃん!!」

さっきの続きはどうなったのだろうか？零は私のことを選んでくれるのだろうか

それからすぐ私は寝た

次の日

「はじめまして！黒羽佳奈くろはなかなです」

なっ、黒羽って言うか性格だいぶちがう

「なんかちがう人みたい」

私は零にこっそり言った

「やっぱり奏のときみたいに記憶がない」

私にそう返した

「あのあんまり覚えてませんがよろしくお願いします」

どづいつことだ・・・もう無関係になったのでは???

「もう無関係じゃないの?」

「あつ言い忘れです。えつと女神入りです!」

「いや、俺の家いるときに入ったみたい」

「あつありえなーーーーい」

私と葵さんは声をあわせいった

「零……くろは……じゃなくて佳奈さんになんかしたでしょ!」
「!?!」

「えっ?なんにもしてないが!」

零は鈍感だからどういいうとかさっぱりわかってない

「まあとにかくよろしく!?!?!」

そついつと佳奈さんは零の手をつかんだ

第十六話 三角関係〜四角関係？

「まあとにかくよろしく！！！！」

そういつと佳奈さんは零の手をつかんだ

絶対なんかしたでしょ！！じゃないと女神は入らないもん！！！！

「零……さっきの続き！どっちをとるの！」

私は葵を見た後に零を見ながらいった

「俺は……」

「あの？なんの話ですか????」

佳奈さんだ、このまま話すともっとやっかいな事になる……

「えっとだな……俺が奏と葵ドッチをとるかって話で〜」

言っちゃったよおー

「私も仲間に入れてください！！！！」

ガアアアア……恋敵ライバルが増えたああ！！

「別にいいんじゃない？」

零が言った

「無理、無理、無理、無理」

私と葵さんは声を合わせ言った

でも、零の気持ちは変わるかもしれない

「じゃあ自分なりに努力してクリスマスの日に言ってもらえばいいんじゃない！！！」

佳奈さんが言った。たしかにそれもそうだ

「さ……賛成です」

「私も賛成」

私と葵さんも賛成し、その日まで待つことになった

「昔々あるところに三人の少女と一人の少年がいました。一人は悪へ手をのばし、もう一人は善へ、もう一人は少年と幸せに暮らした……」

どこからか聞こえてくる不思議な物語、まるで……本当にあるかのような……

葵

次の日

「あああああどんな努力すればいいのかなあ・・・ううわかんないよお・・・そうだ!!!!!!」

私はバックに入ってるケータイを取り出した

「あの零君ですか？もし良かったら今度、ゆうえんちにいきませんか??？」

「ああ抜け駆け??？」

ケータイからは女の声・・・ケータイ番号もあってる

「あ・・・あのどちらさまでしょうか??？」

「佳奈だよおー！おはよう」

佳奈さん・・・男の人のケータイを見るのは・・・

「ていうか、なんで佳奈さんが零君のケータイに出てるのですか!!」

「そういう葵ちゃんも、なんで零さんじゃなくて零君なのお??？」

うっ・・・それは努力です・・・ずっと零君を連発し言えるようにしたんです!!」

「努力をしたんです!」

私はいばるように言った

「そうですか！私は零兄ちゃんと無理くり言ってもいいように交渉しましたが？」

「うう……」

でも……呼び捨ての奏さんのほうが上じゃないか？？

佳奈

「零兄ちゃん！ムフフン！葵ちゃんを追っ払いました！！」

私は零兄ちゃんに自慢したが、なぐられた

「零兄ちゃんはやめろ！あと勝手に人のケータイ見んな！！」

「零兄様のほうがよかった??」

「やめろ！……零とかそういうのにしろ！！誤解をまねく言い方はやめろ」

うーん。おそるでし……あつ！

「じゃあ……ダーリン!!!!」

私は零じゃなくてダーリンに抱きつきながら言った

「お前は彼女よりも妹のほうに近いな……」

ムツ・・・ダメだったか

「子供じゃないもん！！料理だって」

「料理だったら美味しいのにな・・・」

予想以上にヒドイ言い方だ・・・

「子供じゃないよぉ！！！！」

「はいはい」

オイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイひどくないか・・・

夜・・・ベットにて

「ううどうしければ奏ちゃんをぬかして零君の彼女になれるか・・・」
うーん・・・なんなんだろう・・・この胸が苦しいっていつか痛
いって感じは・・・

奏

零は私の・・・絶対だれにも渡さない！！・・・だからアタック・
・・・アタック！！

第十七話 とりあい作戦!!!

奏)

零は私の・・・絶対だれにも渡さない!!!・・・だからアタック・
・・・アタック!!!

次の日

ピンポン 零の家にて

いないかな・・・

ガチャ・・・ あついたいた

「零・・・2人で学校にいかない??」

零は半分こまった顔で私を見る

「どうしたの??」

「いや、佳奈がな・・・」

「佳奈さんが??」

さっそく邪魔されるのぉー

「佳奈も一緒にいいか??」

「あ……うん！」

しょうがない……変に嫌って言うてもダメだろうし……

ピンポーン

「あの一緒に学校に行きませんか?？」

ガーン葵さんまで……結局4人で学校へ……

キンコーンカンコーン

授業中なら邪魔されない……よね

「れ……零あのおさ教科書、忘れたから隣で一緒に見ていい??？」

「ああうん……」

零……顔アカッ！熱あるのお……ていうか近くだとシンセン
だなあ

「あのおさ奏の誕生日って明日だよな?？」

零がいきなり聞いてきてびっくりした……って明日が自分の誕
生日って忘れてた……

「うん！そつだよ……!?!?!」

「そつか……」

零の顔は耳まで真っ赤・・・キャーキャーカッコイイ!!!!!!

葵

キンコーンカンコーン

「零君??一緒にお弁・・・か・・・奏さん・・・って佳奈さんも
!!!」

むううさきに手をうつてましたか・・・

「あのお私も一緒に・・・」

「ヤダ!!!!!!」

佳奈さん・・・ヒドい・・・

「いいじゃねえか、みんなで食べようぜ!!!!!!」

さすがです。零君!!!!!!

「あ・・・ありがとおーございます」

私はペコリとお辞儀をして零君の隣に・・・

「零君の隣は私!!!!!!」

佳奈さんはギュッと零にくっつく・・・が零君にたたかれた

奏さんはここは私の場所だ！つて雰囲気を出している・・・無理だ・・・

しかたなく私は零君から向かえの席にすわった

「あの零君・・・私！お弁当を作ってきたので食べてください！
！！！！」

「えっああ・・・」

私は零君から許可をいただいたので、バックからお弁当を出し渡した

「うおうめえー！！！！！」

私は零君のその言葉を聞き、後ろを向いてガッツポーズした

零

「うおうめえー！！！！！」

すごいな皆・・・っていうか弁当すごく豪華なんだけど食べるのがもったいない・・・

家にて

奏は優しく、それでいて頭が良くて、明るくて・・・俺に未来をくれた・・・

葵は優しくて、人見知りでおだやかで・・・がんばりや・・・

佳奈は明るくて、うるさくて、妹っぽくて・・・バカ・・・

俺はベットに入った・・・

俺は今、奏が好きだがもしかしたら葵・・・佳奈・・・のどちらかを好きになるかもしれない・・・でも、全然知らない誰かかもしれない・・・でも俺は俺の未来をつくる！！！！

第十八話 奏への告白

俺は今、奏が好きだがもしかしたら葵・・・佳奈・・・のどちらかを好きになるかもしれない・・・でも、全然知らない誰かかもしれない・・・でも俺は俺の未来をつくる！！！！

?????

「か・・・奏さん！！！！好きです！付き合ってください」

奏さんは戸惑った顔をして、こちらをチラチラ見る

「えっと・・・好きな人がいるので・・・」

やっぱり零のほぅがいいのか・・・

「じゃあ友達から・・・いいですか??？」

「えっまあ友達からなら・・・」

戸惑った顔を変えないまま奏さんは言った

「あの映画のチケットが福引きで当たったのですが・・・一緒にいいですか?」

「うん・・・まあ予定がなければ・・・」

「じゃあ！！明日・・・いいですか??？」

「えっ！明日・・・うーんたぶん大丈夫！！」

「じゃあ明日、学校の南口で！！」

「うん！！」

そういうと、奏さんは笑顔で手をふってどこかへ走っていった

奏

授業時間にて

ハアまさか学校体験っていうか散歩？しているときに告白されるとは・・・っていうか告白って・・・

「どうしたんだ？さっきからブツブツなんか言ってる」

隣の席の零が心配そうに聞いてくる。零は私がブラックボードに洗脳？されていて、小さいことでも心配されてくれるようになった。

「ああ、なんでもない！ちょっと明日さそわれただけだから」

「誰に・・・？？」

ああ言うか・・・もう言おう別に隠すようなことでもない

「えっとそのお告白？されて・・・あつても断ったよ・・・うん私は・・・ねっで、友達からって事になったから明日、映画を見に行くことになった」

ふうう、なんかいろいろとすっきりした・・・

零

「えっとそのお告白？されて・・・あつでも断ったよ・・・うん私は・・・ねっで、友達からって事になったから明日、映画を見に行くことになった」

おいおいおいおいおい、なんだそりゃあー

「じゃあ俺もついていく！」

まあ別にいいけど・・・さつきから周りの人の視線が・・・

「れ・・・零、授業中だからあとで話そっ！！！」

私は焦るように言うと、零はまわりからの視線に気付いてくれた

「おっおう！！！」

はあよかった・・・そこまで鈍感じゃなかった

奏

うーん、でも零だけ連れてくとヤバい事になる気が・・・よし！！

私はバックからケータイを取り出し電話した

「あつもしもし・・・あの明日、映画・・・予定あんの？？うん、

そっか」

断られたが、まだ一人残ってる!!

「もしもし・・・うるさい!!・・・あっゴメン・・・明日、映画行く??あっうんじゃあ南口で!!」

次の日

私は南口に早めについた

「あれえ、誰もいないや・・・」

4分後・・・あっ・・・零だ!!!!

「おはよう!早いね!!」

「奏のほづがだいぶ早いつつーの!!」

「だってえー零に早く会いたかったんだもん!!」

私はウィンクをして、言った

零は顔が赤くなったのを下を向いて隠した

次に告白男子の跡あとかべしん加辺晋吾君が三番目に来て

「もう一人、呼んでるから!!」

予定集合時間から10分後・・・あっききたきた

「ゴメーン！用意があちよつといろいろあつてえ！！」

そう私が呼んだのは佳奈さんで……ってふつうわかるか……

「おはよう」

私は挨拶をしたのだが、無視されしかも、零に抱きついていて……

やめる………そう叫びたかったが我慢した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5478z/>

女神しか知らない恋の道!??

2011年12月31日19時51分発行